



## 永岳の画は直弼好み？

井伊家歴代の菩提寺、清涼寺に伝わる有名な井伊直弼（1815～60）の肖像画は、直弼が桜田事変で倒れる2か月前の安政7年（1860）正月、狩野永岳（1790～1867）に描かせ、それに自作の和歌を記したと伝えるものです。

永岳は、桃山時代から続く京狩野家の第9代で、幕末の京を代表する絵師の一人です。江戸の狩野派が、最大の権力者である江戸幕府の御用をつとめて大きな力を持ち続けた一方、京狩野家は、永徳の高弟である初代山染や山雪が活躍した後は特筆すべき活躍の場がないまま代を重ねますが、永岳は、その実力でもって再び京狩野家を表舞台に立たせることに成功します。

京狩野家は本来、朝廷や摂関家である九条家、妙心寺や本願寺などの大寺院の御用を中心としていましたが、永岳は需要層を拡大、大名家である彦根の井伊家や紀州徳川家の御用もつとめるようになりました。そして特筆すべきは、これら権力層だけでなく、新興の富商・富農層にも広く受け入れられたことです。それ

も、京・大坂のみならず、遠く飛騨の高山や近江の長浜でも人気を誇りました。永岳が多様な層に受け入れられた理由の一つに、伝統的な京狩野の画風から当時流行していた円山四条派の画風まで、ありとあらゆる画風を貪欲に採り入れたことがあります。格式のある狩野派が町

絵師の円山応挙の流れをひく画風で描くのですから、時代の変化というのはおもしろいものです。永岳が活躍した19世紀は、家柄や格式のみでは通用しない時代となっていたのです。

永岳と彦根藩との関係は、直弼の代からと考えられます。永岳は藩から五人扶持をあてがわれ、通常は京にあつて御用をつとめ、藩主が国入りするときには彦根に赴いて御前での席画をおこなったりしています。

ところで彦根藩には、この時期すでにお抱えの御用絵師がいました。江戸で活躍していた佐竹永海（1803～74）です。永海は、前藩主直亮の代に召し抱えられ、直亮の私的な御用を多くつとめ、直亮没後にはその肖像画も描いています。

単純に考えた場合、彦根藩が永岳を採用したのは、江戸だけでなく彦根での御用絵師も必要だったからといつことにならざるでしょう。しかし、想像を逞しくすれば、直弼が敢えて自分好みの絵師を求めたとも考えられないでしょうか。

直弼は、若いころから国学に傾倒して朝廷を尊崇する傾向にあり、家柄に対する強い意識を持っていました。そのため、代々朝廷の御用をつとめる京狩野家の家格を高く買っていた可能性が考えられます。また、永岳の伝統的な画風が生真面目な直弼の志向に合致したとも考えられます。永海の雰囲気先行の文人画風の画よりも、伝統に裏打ちされた京狩野の画

の方が直弼の好みに合っていたのではないうのでしょうか。そして、仲がよいとはいえない直弼、直亮が鼻腹にした永海とは別の絵師を、自分の意志で採用したいという思いもあつたのかもしれない。

肖像画は鑑賞画と違い、特別な意味を持つものです。なぜ、直弼が自分の肖像を永海ではなく永岳に描かせたのかという疑問は、こう考えることで解けるような気がするのです。

（彦根城博物館学芸員 高木文恵）

写真の肖像画は、彦根城博物館企画展「伝統と革新―京都画壇の華 狩野永岳―」で11月25日(月)まで展示中です。



井伊直弼像（清涼寺蔵）